慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	近世初頭中部ドイツの農村都市，市場町について（一）
Sub Title	Die ländlichen Städtchen von Mitteldeutschland im Anfange der Neuzeit
Author	寺尾, 誠
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1963
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.56, No.3 (1963. 3) ,p.214(16)- 234(36)
JaLC DOI	10.14991/001.19630301-0016
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19630301-0016

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

近世初頭中部ドイツの農村都市、市場町について（一）

寺尾　誠

第一節　問題の所在
第二節　中独における都市、小都市、市場町の成立
第三節　中世後期、近世初頭の農村的小都市、市場町成立の基本条件㈠（以上本号）
第四節　中世後期、近世初頭の農村的小都市、市場町成立の基本条件㈡
第五節　農村的小都市の化石化現象
——領邦体制下の構造停滞型農村都市——
第六節　農村的小都市の化石化現象の原因究明
——結語にかえて——

第一節　問題の所在

私は先に本誌昨年度十月号にロベルト・グラッドマンの中世後期西南ドイツの市場構造に関するすぐれた研究を紹介した。[注1] 今簡単に彼の所論を述べれば、彼は西南ドイツにおいて中世後期に大量に成立してくる極小都市（人口五千—二千人）、最小都市（人口二千人以下）の存在に注目すると共に、これらを含む小都市群の市場構造が遠隔地市場ではなく局地市場 der örtliche Markt、近隣市場 Nahmarkt であることを指摘する。[注2] このことはこれら小都市が遠隔地商業用の道路の傍にではなく、むしろそれから離れた広範な地域に分散していること、これら小都市の市場の中心が歳市にではなく、週市にあることによく示されている。[注3] この場合週市は周辺の農村の農民と都市手工業者の商品交換市場であるから、グラッドマンの局地市場の定義は厳密にいえばビュッヒャーの都市と農村の局地間市場にあたるものであるといえよう。従ってグラッドマンはこのような小都市は遠隔地商業路から離れているといっても必ずしも農村内部に自生的に成立したものでなく、むしろ農民と手工業者の相互交換に便利な地点に意識的に成立したものが多いというのである。具体的には領主のブルク（城塞）、荘園庁、修道院や教会の所在地、裁判の行われる場所等であるが、地理的にいうと小河川の渓谷の深み Zug zur Tiefe にあるものが多い。[注4] 小河川の渓谷地帯は先の局地間交換の為の自然的市場圏を形成するからである。また農村との関係でいえばこれらの地点が多く古い農村と並んで位置していることから、これらの小都市も古い農村と並んで成立することが多いのであって、この点彼は農村内部からの自生的発展説をとるラッツェル等の見解に反対し、農村の傍への領主による意識的建設説をとるリーチェルの見解に賛意を表わすのである。[注5] 尤も彼は農村からの自生的な都市成立を全く認めないわけではないが（特に小都市群において）、にも拘らず領邦分裂の甚だしい西南ドイツでは領主達の都市建設競争の結果意識的建設が支配的であったというのである。[注6] この点で彼の立証はあまり十分なものでなく先の十月号で紹介した都市発生期についての統計も（第一表）、千九百十年の人口規模別によるものであって、都市成立の前提となる定住についての記述が欠けているのである。勿論彼は著書の中で彼の論拠として若干の例を示しているが、今これを示すと次のようになる。すなわち農村の傍に Neben Dorf 建設された都市としては、十二世紀に中都市一、十三世紀に中都市三、小都市七、極小都市八、最小都市一、十四世紀に小都市一、極小都市一、最小都市四で、十三世紀に中小都市を中心として集中しており、十四世紀には最小都市にもみられる。[注7] このように意識的建設の例が圧倒的に十三世紀に集中しているのに対し、自生的成立の例は十三世紀に極小都市一、最小都

市一、十四世紀極小都市二、十七世紀極小都市一、十八世紀極小都市一、十九世紀小都市二、極小都市五、最小都市四、二十世紀小都市三であって、その比重は明らかに極小都市、最小都市にあり、その成立期もずっと遅く十九世紀に最大の頂点を迎えている。[注8] 従って中世に関する限り、この統計では彼の主張が裏づけられているといえるが、全体では二十六対二十一で彼のいうほど意識的建設が圧倒的であるわけではない。さらに十三・四世紀に大量に成立する極小都市、最小都市の大半が、その成立事情不明のままであることも問題であり、グラッドマンは他の箇所で極小都市、最小都市は中央集権的領邦権力の存在するバイエルンにおける市場町 Markt と同じもので、これが都市化するところに西南ドイツの特殊性があるとしているのである。[注9] また最小都市については三十四の都市で（全体で六十二）二十世紀初頭でも農業が優勢であり、この内十八は定住形態も農村的様相を示しているというのであるから、農村からの自生的都市化の傾向はグラッドマンの主張よりは強いことが十分考えられる。[注10] この他にグラッドマンも市場町が大村落の形で存在していることを指摘しており、事実千九百十年人口四千人のコルンヴェストハイム村、人口千人内外のトロヒテルフィンゲン村は夫々十八世紀、十七世紀に市場町、農村市場であったことが判明している。[注11] このようにグラッドマンの所論は一面で西南ドイツの小都市の特殊性を明らかにしているのであるが、農村との関係についてはなお解明すべき問題が残されている。尤も彼は一方で意識的建設都市の存在を強調すると共に、他方でこれら小都市の局地市場成立の根拠として農業生産力の高水準と社会的分業特に農村家内工業の前進をあげるのであるから、グラッドマンの問題意識は先の十月号で紹介したように、ビュッヒャーやリーチェルのそれをこえた内容を含んでいるといえる。[注12] そしてこの点で彼の所論はウェーバーが西ドイツ市場構造の東ドイツのそれに対する独自性を最小の集落内及び相互間の商品交換に求めたのと略同様の問題意識を示しており、[注13] ここから商人の生産者支配と共に、生産者自身の商人化という二つの道の発想すらあらわれてくるのである。[注14] 従ってグラッドマンの研究が、我々に与える示唆は、中世的都市とその市場構造をこえる社会的分業の進展が、新しい市場の成立をもたらすが、これが中世都市化して行くという矛盾した事実が、西南ドイツ中世後期、近世初頭の市場構造、都市制度の一つの特徴ではないかということである。私はこのような現象を化石化現象としてよびたい。このような化石化現象については、すでに先進国イギリスの農村市場の特権都市化（農村都市の上昇転化）という事実について大塚久雄氏等によって指摘されているところであり、[注15] さらに最近大塚氏の提起しているオランダ型貿易国家の構造停滞的国内市場の型に一つの典型を見出すことができる。[注16] 特に最後の発想は国内市場が急速に拡大して行くイギリス型に対して、オランダ型では農業制度の停滞性とも関連して国内市場の拡大が徐々にしか進まず、この為市場構造はあくまで中世都市を中心とせざるをえないというものであり、従来機械的に理解されがちの二つの道の発想をこえた新しい問題意識が感ぜられる。つまりこの種の構造停滞型はいわゆるプロシャ型では勿論なく、そうかといって純粋のアメリカ型（イギリス型）でもない。強いていえば後者に近いとしても厳密にいえば、やはり質的な違いが存在している。このような両者の中間的な型としてのオランダ型は、先のグラッドマンの所論を照らし合わせるときに、単にオランダのみならず、ヨーロッパ大陸に広くみられる型であり、特に西南ドイツについてもこの型を想定することが妥当である。[注17] ところで大塚氏はこの構造停滞のオランダ型を中世都市に農村工業の担い手が吸収される型で表現しているが、私はこれ以外に農村内から自生的に成立した農村市場が、市場町化し、さらに中世都市化するという型が西ドイツにおいても存在すると考える。[注18] そしてこの型こそ私が化石型と名づける類型なのである。この化石型の名称はすでに西南ドイツ及び中部ドイツ地代荘園制について、ベロウやリュトゲが与えたものであるが、[注19] それは地代荘園化しているという前進的側面と、にも拘らずその体制が決

第一表　Württemberg

成立時期＼人口規模別都市	大都市 人口10万以上	中都市 人口10万—2万	小都市 人口2万—5千	極小都市 人口5千—2千	最小都市 人口2千以下
12c		2	1		1
13c	1	4	15	29	17
14c	1		6	7	27
15c			1		8

R. Gradmann, Die städtische Siedlungen des Königreiches Württemberg. 1914, SS. 143-149, 170-171.

第二表 Sachsen

成立時期 ＼ 都市形態 定住形態	都市 自生型	都市 計画型	小都市 自生型	小都市 計画型	市場町 自生型	市場町 計画型
11 c		1				
12 c		3				
13 c		19	6	11	1	
14 c		7	20	18	2	2
15 c		7	10	9	7	
16 c		2	11	2	9	1
17 c	1	3	1		5	
18 c					13	4
19 c					9	
20 c	10	3				
計	11	45	48	40	46	7

Karlheinz Blaschke, Historisches Ortsverzeichnis von Sachsen, 4 Bd. 1957 より作成。

定的に崩壊しないという保守的側面の矛盾した二面性を表現する言葉として使用されているのである。そして先にあげた農村市場の中世都市化という型は、その二面性の故に農業制度における化石化現象と対応する市場構造の化石化として名づけることができよう。このように構造停滞型の市場構造は中世都市型と農村市場の化石型とに大別されるが、さらにこの中間に半中世都市型ともいうべき中間形態も存在するのであって、(注20)グラッドマンの指摘する小河川の渓谷の傍に成立する小都市群もこれに入る。グラッドマンはヴュルテムベルグの極小都市四十五の内半数以上がかかる位置にあるもので、内二十が河川に突起的に突き出た形をなしているとしている。(注21)また最小都市六十二の内、二十三が小河川の傍で、内十が突起的であるとしている。(注22)このような定住はマイン・ヘッセン地方では渓谷集落 Tal とよばれており、グラッドマンのいうように、近隣の商品交換の市場として重要な意味をもっている。(注23)この他大塚氏のいう中世都市型が古典的な中世都市に代表されるとすれば、中世後期に社会的分業の進展に伴って、農村の傍に様々な形で(特にブルクとの関係で)建設される小都市もこの半中世都市の型に含めうるであろう。(注24)グラッドマンはこれら三つの型の内第三の型が西南ドイツにおいては有力であったとするのであるが、彼には以上のような類型化の発想はなく、この第三の中間型を第一の型と一括して意識的建設都市＝局地市場としてとらえているといえよう。ところで以上にのべた三つの型によって我々は西ドイツの市場構造の構造停滞性をよく示しうると考えるが、これと

第三表 Hessen

成立時期 ＼ 都市の前提定住 都市形態	農村 都市	農村 市場町	城と農村 都市	城と農村 市場町	城と渓谷集落 都市	城と渓谷集落 市場町	城 都市	城 市場町	荘園と農村庁 都市	荘園と農村庁 市場町	荘園庁 都市	荘園庁 市場町	修道院・教会 都市	修道院・教会 市場町	新規建設 都市	新規建設 市場町	不明 都市	不明 市場町
12 c	2						2				3		1					
13 c	3		14	2	2		24		2		3		1	1	3		4	
14 c	12	4	11	3	2	4	12	1		1			2		2		1	
15 c	2	1	2		1		1		1									
16 c		11											1					
17 c	2	3													1			
18 c							1								1			
19 c	2	1																
20 c	5																	
計	28	20	27	5	5	4	40	1	3	1	6	0	5	1	7	0	5	0

E. Keyser, Hessisches Städtebuch, 1957 より作成。

第四表 Rheinland

成立時期 ＼ 都市の前提定住 都市形態	農村 都市	農村 市場町	城と農村 都市	城と農村 市場町	荘園と農村庁 都市	荘園と農村庁 市場町	荘園庁 都市	荘園庁 市場町	修道院・教会 都市	修道院・教会 市場町	城 都市	城 市場町
10 c											1	
11 c							1		1			
12 c	1				1		2				1	
13 c	6		2		1		5	1	5	1	7	2
14 c	8	2	5		1	1	1	1	1	1	2	1
15 c		5	1	1	1	2					2	5
16 c		6			1							
17 c		2										
18 c	1	3			2	1						
19 c	19	2			1				1			
20 c	10											
計	45	20	8	1	8	4	9	2	8	2	13	8

E. Keyser, Rheinisches Städtebuch 1956 より作成。

並んで市場町や農村市場も存在することは、第二表(ザクセン)、第三表(ヘッセン)、第四表(ラインランド)をみれば明らかである。(注25)

本稿は以上簡単に考察した西ドイツ市場構造の構造的停滞性についての仮説を、西南ドイツとほぼ同じ化石型農業制度をもつといわれる中部ドイツの史実に即して、より厳密に検証することを課題としたい。とくに大

塚氏のいわゆる古典的中世都市型の構造停滞型と共に第二、第三の型を重視し、中でも第二の型のもつ意味を考察してみたい。何故ならこれこそ農業制度の化石化現象に照応する市場構造の化石型として、西ドイツの特殊性を最もよくあらわしていると思うからである。(注26) またそれと共にこのような強固な構造停滞型の存する中で、社会的分業の進展と共に成立し、近代化に向って粘り強く前進する市場町、小都市についても注目してみたい。

注(1) Robert Gradmann, Die städtischen Siedlungen des Königreichs Württemberg, Forschungen zur deutschen Landes-und Volkskunde, Bd. 21, 1914. Vergleich, Süddeutschland, 2 Bd., 1956 (Unveränderter fotomechanischer Nachdruck der I Auflage von 1931.)

(2) R. Gradmann, Die städtischen Siedlungen～, SS. 173—174, Vergleich, Süddeutschland, Bd. 1, S. 184.

(3) R. Gradmann, Die städtischen Siedlungen～, S. 164, Süddeutschland, Bd. 1. S. 166.

(4) R. Gradmann, Die städtischen Siedlungen～, S. 164, Süddeutschland, Bd. 1, S. 161. 渓谷の市場については、R. Gradmann, Die städtischen Siedlungen～, SS. 164—165, Süddeutschland, Bd. 1, S. 160.

(5) R. Gradmann, Die städtischen Siedlungen～, SS. 150—163, Friedrich Ratzel, Anthropogeographie, Bd. 2, S. 449 ff. 但し、ラッツェルの農村市場自生説は、農村からの都市の自生的発展を交易条件と結びつけて、良い交易条件の農村は必ず都市化するというものであり、グラッドマンは自生説と共に、交易条件についてのラッツェルの説にも疑問を提出している。Siegfried Rietschel, Markt und Stadt, 1897, SS. 232—233. リーチェルは古代的起源をもつ都市と農村の傍に建設された都市と農村からの自生的な都市の三つの類型をあげ、この内ドイツの中世都市としては第二の建設都市が典型であるとしている。R. Gradmann, Die städtischen Siedlungen～, SS. 162-163. 167-169. Süddeutschland, Bd. 1, S. 164-169. なおリーチェルの見解は今なおドイツ学界では支配的であって、グラッドマンは勿論最新の研究においても、彼の建設都市説の影響がうかがわれる。例えば Heinz Stoob, Minderstädte, Formen der Stadtentstehung im Spätmittelalter, Vierteljahrsschrift für Sozial-und Wirtschaftsgeschichte, Bd. 46, 1959, SS. 1-28. は中世後期の小都市研究のすぐれた論文であるが、小都市について自生的発展を主張するキールマイヤーに反対して、計画的建設説をとっている。

(6) R. Gradmann, Süddeutschland, Bd. 1, S. 164-169.

(7) Vergleich, Die städtischen Siedlungen～, SS. 159-160.

(8) Ibid, SS. 162-163

(9) R. Gradmann, Süddeutschland, Bd. 1, S. 166, Bd. 2, SS. 421-422.

(10) R. Gradmann, Die städtischen Siedlungen～. S. 148. Süddeutschland Bd. 1 SS. 162-163.

(11) R. Gradmann Süddeutschland, Bd. 2, SS. 421-422. グラッドマンはバイエルンの市場町が都市的性格が強いのに対し、シュヴァーベンの市場町は大農村の性格が強く、家畜及び雑貨市場が開設されているとしている。なおコルンヴェストハイムについては August Skalweit, Das Dorfhandwerk vor Aufhebung des Städtezwanges, S. 69. トロピテルフィンゲンについては Jacob Grimm, Weisthümer, Bd. 6, SS. 254-255. 前記シュトープもこの種の農村市場の存在を指摘している。Stoob, a, a, O., S. 17. 但しそれらの大半は都市化しなかったところにこの地方の特殊性がある。

(12) R. Gradmann, Die städtischen Siedlungen～, S. 173, SS. 189-192, Süddeutschland, Bd. 1, S. 169-171, 182-184. リーチェルの前掲書の他に Karl Bücher, Die Entstehung der Volkswirtschaft, 1906, SS. 116—135.

(13) Max Weber, Kapitalismus und Agrarverfassung, Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft, Bd. 108, SS. 444-446.

(14) R. Gradmann, Die städtischen Siedlungen～, S. 190, Süddeutschland, Bd. 1, S. 170, 184.

(15) 大塚久雄「欧州経済史」百四十九頁、米川伸一「中世イギリスにおける『農村市場』の成立」社会経済史学二十二巻三号所収、角山栄「中世末サフォークにおける農村毛織物工業の発展と『農村都市』の成立」社会経済史学二十三巻二号所収。同氏「イギリス農村工業におけるジェントリ織元の成立」経済理論三十一号十二頁。

(16) 大塚久雄「オランダ型貿易国家の形成——絶対王制の構造的停滞の一類型」西洋経済史講座四巻三百二十五頁—三百五十二頁。

(17) グラッドマンの以上に紹介した所論そのものが、社会的分業の進展に伴う局地市場の展開が、領邦諸侯の中世都市建設競争によって建設都市となるという化石化現象の一類型をはっきり示しているし、先にあげたシュトープの中世後期の小都市論もグラッドマンの主張とかなり共通した見解を含んでいる。彼はフランスでは農村市場の形であらわれたものが、西ドイツでは都市的性格をもつ半都市 Minderstädte としてあらわれたことを指摘し、さらにこの型が南フランスにも広くみられたとしている。H. Stoob, a. a. O., SS. 26-27. なおフランスについてはさしあたり中木康夫「商業の発達とギルド制度の変容」大塚久雄他編著「西洋経済史講座」一巻二百五十—五十九頁、誉田保之「問屋制度とマニュファクチャーの絡みあい——とくにフランス絶対王政におけるリョンのばあい——」同講座二巻百九十二—二百六頁。ドイツについては諸田実「ドイツ農村工業の展開——ザクセンの麻織物業を中心に——」商学論集二十九巻三号三十二頁。松尾展成「封建的危機の経済的基礎——ザクセンのばあい——」西洋経済史講座三巻六十七—八十頁。

(18) これについては附表第二表、第三表、第四表における中世後期の農村よりの自生型小都市の発生に注目せよ。なおこれについては本稿及び近い将来発表予定の「近世初頭西ドイツの局地市場」を参照。

(19) Georg von Below, Geschichte der deutschen Landwirtschaft des Mittelalters, 1937 SS. 73-74, Friedrich Lütge, Die mitteldeutsche Grundherrschaft, 1934, SS. 202-203, Vergleich, Deutsche Sozial-und Wirtschaftsgeschichte, 1952, SS. 102-105. 彼は主に西南ドイツのグルントヘルシャフトについてこの言葉を使用しているが、中独についてもこの現象があるとしている。

(20) これについては、附表第二表、第三表、第四表を参照。特に第三表のヘッセン、第四表のラインランドの内、都市化の前提定住が城 Burg と村 Dorf、荘園庁 Herrnhof と村 Dorf、城と渓谷集落 Tal の諸都市、市場町に注目。なおこれについては先のシュトープの論文が、詳しい。

(21) R. Gradmann, Die städtischen Siedlungen～, S. 145.

(22) Ibid., S. 147.

(23) H. Stoob, a. a. O., SS. 10-11.

(24) 第三表、第四表参照。R. Gradmann, Die städtischen Siedlungen, S. 164.

(25) 第二表は Karlheinz Blaschke, Historisches Ortsverzeichnis von Sachsen, 4 Bd., 1957 より作成。第三表は Erich Keyser, Hessische Städtebuch, 1956 より作成。

(26) 先にも指摘したように、この種の農村都市の上昇転化（化石型）は、西ドイツのみならずイギリス（ラヴェナム）、フランドル（ホンストホーテ）、北フランス（レーグル）等ヨーロッパの先進地帯においても成立するのであり、逆に西ドイツの中でもライン・ヴェストファーレン地方では、かかる化石化現象が比較的弱く自生型市場町、農村市場の広範な成立がみられる（第四表参照）。従って化石化型だけで西ドイツ市場構造を特徴づけることには問題があり、夫々の国内市場の中で中世的市場体制と近世的市場体制の対抗関係の内にこの類型の位置づけが行われるべきであって、程度の差はあれ、この種の化石化型が成立しているとみるべきであろう。私が西ドイツの特殊性をこの型で強調したのは西ドイツの大部分では、先進地方に比して、この型の成立の程度がはるかに強いという意味である。

第二節　中独における都市、小都市、市場町の成立

中部ドイツは西南ドイツと並んで地代型グルントヘルシャフト（化石型）の地方とされているが、都市発生の傾向において、も両地域は大体共通の傾向をなすといわれる。[注1] すなわち下ザクセンの都市の型を研究したガブリエレ・シュヴァルツによるとテューリンゲンの都市発生期は大別して二つにわかれ、第一の山は十二世紀末から十四世紀迄で、この間に成立した都市は領邦諸侯を始め封建領主によって建設されたものが多く、その多くはブルグとの関係がみられる。これに対し農村から自生的に成長した都市は十五世紀以来みられるが、全体としては概ね建設都市の方が優勢である。[注2] ところで我々は、テューリンゲンについては適当な史料を持ち合わせていないが、テューリンゲンに隣接したザクセン地方については、都市発生についての好史料がある。それはカールハインツ・ブラシュケの作成した「ザクセンの歴史的集落簿」Historisches Ortsverzeichnis von Sachsen である。[注3] これはザクセンの大部分を含む地域の都市といわず、市場町といわず、農村といわず、その他一切の自立的な集落の歴史を地理的位置、制度史、集落形態（耕地形態）、人口数、行政区域の所属、グルントヘルの所属、教会制度、歴史的集落名の八項目にわたり、簡単に記載したものである。この史料が我々の研究にとって有益なのは、第一に、そこには農村と共に都市 Stadt のみならず、小都市 Städtchen、市場町 Flecken も残らず収録されていること、第二に都市成立の仕方が農村からの自生的な成立であるか、計画的なそれであるかについての記述が示されていること、[注4] 第三に人口数の歴史的変化が示されていること、第四に都市制度についての変化も読みとられること等である。特に第二の都市成立の仕方についての記述は、グラッドマンの統計では不明確であった都市成立の仕方、前提となる定住等について多くの示唆を与えてくれるものである。さてこのブラシュケの史料から作成したのが、第二表である。これは都市的定住の形態を夫々農村からの自生型と計画的建設型とに区別して、その夫々の時代別の発生を調べてみたものである。[注5]

この表から読みとれる第一の特徴は、都市 Stadt の発生の頂点は十三世紀にあり、西ドイツ全体の古典的都市建設期と一致していること、と同時にこれら中世盛期を頂点とし近世初頭まで続く都市は、いずれも計画型であって、農村よりの自生型が一つしかないことである。[注6] これに対し第二の特徴はこの都市よりややおそく、十四世紀に頂点をもつ小都市群の広範な成立がみられることである。それらの小都市は十四世紀に頂点があるとはいえ、十三世紀に十七、十四世紀に三十八、十

五世紀に十九、十六世紀に十三と中世後期全体に広く成立している。その上注目すべきことはこの小都市の中には計画型四十に対し自生型四十八で両方の型が大体均衡して存在していることである。しかもこれを時代別にみると、十三世紀には計画型十一、自生型六で、圧倒的に計画型が多いのに対し、十四世紀には十八対二十と略同数となり、十五世紀には九対十、十六世紀には二対十一と自生型が計画型を圧倒しているのであり、計画型が十三・四世紀を主な成立期としているとすれば、自生型の方は十四・五・六世紀を主な成立期としていることが判る。これは先にグラッドマンの所論においてやはり小都市群の中で、第一段階に計画建設型、第二段階に自生的成立型が発生しているのと似た傾向であり、中部ドイツでは特にこの二段階が重なり合って直接連続していることが明白によみとられる。我々はここに先に立てた農村市場の中世都市化という化石型小都市（第二類型）と古典的中世都市に続く半中世型小都市（第三類型）の並存を都市と市場町の中間形態としてはっきり確認しうる。さて以上のように第一段階の古典的中世都市、第二段階の半中世都市的小都市、第三段階の自生的小都市（化石型）の三段階に続いて第四段階に市場町成立がみられるのである。この市場町は農村よりの自生的定住であって、計画型との比率は四十六に対する七と圧倒的に多い。この農村的市場町の成立期をみると十三・四世紀にも少数の成立があるが、十五世紀から十九世紀にかけて長期間にかなりの数が成立している。この内十六世紀が第一の頂点、第二の頂点が十八世紀にある。

このようにザクセンの都市的定住の発生は四段階に分かれ、近世初頭以降の農村的市場町の広範な成立と共に、中世後期の二つの型の小都市群、特に農村市場の中世都市化型（化石型）の大量の成立が注目される。このような小都市、市場町についての型の分類は、今までのところ定住形態によるブラシュケの記述を基準としたものであるが、ブラシュケの他の論文から都市の制度的側面による分類を分析してみよう。(注7) これは時代的には十六世紀迄しか扱っていないが、今これを第五表として示すと、小都市については、都市・半都市・半農村・純農村の四つの型、市場町については、都市的・半農村的・純農村的の三つの型がある。都市若しくは都市的とは行政機関の長が市長 Bürgermeister であり、下級裁判権も市参事会 Rat の手中にある型で、半都市的とは下級裁判権は市参事会にあるが、行政機関の長に都市裁判官 Stadtrichter（恐らく領主の任命する）がなるという型で、実質的には都市に近い。半農村的とはこれと逆で行政機関の長は市長であるが、下級裁判権の方はグルントヘルに把握されているもので、実質的にはむしろ農村に近い。純農村的とは、行政機関も都市裁判長、裁判権もグルントヘルと実質的には農村と同じ制度の都市的定住である。そこで第五表をみると、小都市の内、都市型十一で頂点は十四世紀、半都市型八で頂点は十六世紀、半農村型二十七で頂点は十四世紀、純農村型は二十九で頂点は十六世紀で、数的には先の分類よりはるかに農村的な性格が制度的には強いことが判る。これは計画型の小都市でも実質的には農村的性格の制度しかないものが多いことを示している。さらにまた都市、半都市型の成立期が、先の統計よりおそく、しかも十五・六世紀には計画型の数を上廻る数となっているが、これは、定住の上では自生的な型でも制度的には中世都市の実質をもつものが含まれていることを意味しており、これこそ厳密な意味での化石型といえるであろう。(注8) なお市場町は大半が純農村的で先の場合と同様であるが、ここでも都市の実質をもつもの二が存在することを忘れてはならない。

第五表 Sachsen

成立時期 ＼ 都市形態 / 制度	小都市 純農村的	小都市 半農村的	小都市 半都市的	小都市 都市的	市場町 純農村的	市場町 半農村的	市場町 半都市的	市場町 都市的
12 c	0	0	0	1	0	0	0	0
13 c	3	8	1	2	0	0	0	0
14 c	7	10	0	4	1	1	0	1
15 c	7	7	3	3	3	2	0	1
16 c	12	2	4	1	5	0	0	0
計	29	27	8	11	9	3	0	2

K. Blaschke, Zur Statistik der sachsischen Städte im 16 Jahrhundert, in ‚Von Mittelalter zur Neuzeit' SS. 137-140 と K. Blaschke, Historisches Ortsverzeichnis von Sachsen より作成。

さてザクセンの諸都市についての一般的な分析はこの程度であるが、ここで最初の統計を地域別に区分してみると、第六表となるが、これは興味ある事実を我々に示してくれる。この地域分類はブラシュケの史料における分類をそのまま採用した

第六表

成立時期 ＼ 都市形態 / 定住形態	Oberlausitz 都市 自生型	都市 計画型	小都市 自生型	小都市 計画型	市場町 自生型	市場町 計画型	Nordwestsachsen 都市 自生型	都市 計画型	小都市 自生型	小都市 計画型	市場町 自生型	市場町 計画型
11 c		1										
12 c								2				
13 c		4	1	3				6	4	4		
14 c		1	3	4				3	5		2	
15 c				1	2				2	1	1	
16 c									5	1	1	
17 c	1	1			2							
18 c					5	1					1	
19 c					6							
20 c												
計	1	7	4	8	15	1	0	11	16	6	5	0

成立時期 ＼ 都市形態 / 定住形態	Mittelsachsen 都市 自生型	都市 計画型	小都市 自生型	小都市 計画型	市場町 自生型	市場町 計画型	Erzgebirge 都市 自生型	都市 計画型	小都市 自生型	小都市 計画型	市場町 自生型	市場町 計画型
12 c								1				
13 c		4		1				5	1	3	1	
14 c		1	5	7				2	7	7		2
15 c		1	4	5	2			6	4	2	2	
16 c			4		4			2	2	1	4	1
17 c			1		1			2			2	
18 c					2	2					5	
19 c					1						2	1
20 c	1	3					9					
計	1	9	14	13	10	2	9	18	14	13	16	4

K. Blaschke, Historisches Ortsverzeichnis von Sachsen より作成。

ものであるが、まず注目されるのは、地域間の不均等性であろう。特に上ラウズィッツと他地域の間の都市発生の不均等性は甚だ大である。すなわち他の三地域が多少の偏差を伴いつつも、基本的には全体の統計の示す傾向と一致しているのに対し、上ラウズィッツだけが、全体の傾向から著しく離れたものとなっている。上ラウズィッツでは、十三世紀を頂点とする都市は、他とほぼ同様であるが、小都市の発生において他との差異があらわれてくる。この内、計画的建設の定住形態をもつ型については、十三・四世紀に他より少い割合ではあるが[注9]一応の成立がみられるのであるが、農村からの自生型については、他より少い割合であるばかりか、計画的な型の小都市に対する割合においても、他地域に比べ著しく低い率でしかないことが注目される。しかも他地域では十五・六世紀まで続行する自生型小都市の発生が、この地域のみ十四世紀で終了し、十五世紀以降一つもみられないのである。さらに注目すべきことは、他地域では、小都市の成立期に連続してみられる農村的市場町の成立が、ここでは小都市成立期と断絶して十八・九世紀にその頂点を迎えるのである。このようなこの地域の都市発生の独自性の歴史的意味については、後に詳しくされるが、今この地域の特殊性をまとめれば、中世後期、近世初頭までの都市成立においては、古典的中世都市とこれに続く中世的小都市が支配的であり、農村からの自生的な小都市、市場町はこれに圧倒されており、極めて微弱にしか発生していないといえる。

さて他の三地域の内、エルツ山地地帯と中部ザクセンは全体の傾向とほぼ一致しているが、特に前者では都市成立の強い度合が特徴的である。すなわち都市についても十三世紀の頂点以外に十五世紀に第二の頂点をもっているし、小都市については、農村よりの自生型が、計画的建設型を圧倒しており、これに続く農村的市場町も他の地域よりも強く十六世紀と十八世紀に二つの頂点をもっている。この内、十五世紀の都市成立の第二の頂点は後にみるように鉱山業の降盛に伴う鉱山都市であるから[注10]、結局この地方の都市成立の特徴は古典的中世都市や半中世的小都市に対する農村からの自生的小都市、市場町の優勢ということが出来よう。これに対し中部ザクセンは十三世紀の古典的な都市成立期、十四・五世紀の計画的小都市、十五・六世紀の農村からの自生型小都市、十六世紀を頂点とする市場町の成立とほぼ全体の傾向に一致し、中世的都市体制と農村からの自生型都市体制（近世的都市体制）が大体均衡し合っているといってよかろう。最後に北西ザクセンをみると、ここでは十三世紀の古典的都市建設は他と同じであるが、これに続く計画的小都市は十三世紀に古典的なそれと重なり合って成立しているだけで、農村よりの自生型小都市が、これをはるかに圧倒して十四世紀・十六世紀に二つの頂点をもっている。さ

らに農村的市場町の成立は比較的弱く、しかも比較的早くその成立期が終了している。従ってこの地域の特徴は古典的中世都市体制と農村よりの自生型小都市（化石型都市体制）の並存であり、他の三地域に比べて、農村よりの自生型の弱体が目立ち、この点で上ラウズィッツの都市構造に一脈通ずるものがあるといえよう。

注（1） Gabriele Schwarz, Regionale Stadttypen im niedersachsischen Raum zwischen Weser und Elbe, 1952, S. 40.

（2） Ibid., S. 40.

（3） Karlheinz Blaschke, Historischen Ortsverzeichnis von Sachsen, 4 Bd., 1957.

（4） 自生型については zur Stadt erweitertes Waldhufendorf, 計画型については Planmäßige Stadtanlage といった記載の仕方であり、主に都市定住形態からの判断であると思われる。

（5） なお Straßenmarktige Anlage や Unregelmäßige Anlage といった記載については、諸要因を考え、自生型か計画型にいれてある。例えば、城塞のある場合には道路市場が必ずしも農村からの自生型を意味しないからである。なおこの統計では村落 Dorf としてのみ記されているものでも、当時市場が開かれていたものがあるが、その大部分は都市化せずに終った。Heinz Pannach Das Amt Meißen, S. 68, Gerhard Heitz, Die ländlichen Leinenproduktion in Sachsen in 15, 16 Jahrhundert, 1960, S. 36.

（6） 古典的建設都市が十三世紀に西ドイツから中部ドイツへと波及していったことについては H. Stoob, a. a. O., S. 20. を参照。

（7） K. Blaschke, Zur Statistik der sachsischer Städte im 16 Jahrhundert, in , Von Mittelalter zur Neuzeit' Festschrift zum 65. Geburtstag von Heinrich Sproemberg, SS. 133-143.

（8） 例えば農村工業都市ミットヴァイダ、フランケンベルグ、オエデラン、ガイタイン等は自生型であるが、都市的制度を完備している。

（9） この時期の内陸小都市の経済的意義については高村象平「ドイツ中世都市」五十七―百一頁に詳しい。それは領主的商品経済を円滑に進行せしめるものであった。Rudolf Kotschke u. Wolfgang Ebert, Geschichte der ostdeutschen Kolonisation, 1937, SS. 200―214.

（10） Johannes Müller, Die Industrialisierung der deutschen Mittelgebirge, Eine wirtschaftskundliche Frage der Vergangenheit-ein wirtschaftspolitisches Problem der Gegenwart, 1938, S. 32. ミュラーはシュネーベルグ（千四百七十年建設）、アンナベルグ、ブッフホルツ（千四百九十六年）、マリエンベルグ（千五百二十一年）、オーバーヴィーゼンタル（千五百二十六年）等の諸都市の連続的成立を例にあげ、六十年間に十六の都市がこの地に鉱山都市として成立したとのべている。これについてはなお Friedrich Weissbach, Wirtschaftsgeographische Verhältnisse, Ansiedlungen und Bevölkerungsverteilung im mittleren Teile des sachsischen Erzgebirges, Forschungen zur deutschen Landes-und Volkskunde, Bd. 171, S. 91 f. 参照。なお第八表のアンナベルグ、シュヴァルツェンベルグ周辺の都市発生を参照。

第三節　中世後期、近世初頭の農村的小都市、市場町成立の基本条件（一）

我々は前節においてザクセンにおける都市、小都市、市場町の成立過程を分析した。特にその際注目に価したことは、全体についての四段階性と共に（十三世紀の都市、十三・四世紀の計画的小都市、十四・五世紀の自生的小都市、十六―十八世紀の農村的市場町）地域間の不均等性の問題であった。そして地域間の不均等性の内特に重要なのは、上ラウズィッツと他の三地域の間の著しい不均等性であろう。すなわち上ラウズィッツでは古典的中世都市や計画的小都市の成立に続く自生型小都市・農村的市場町の成立が、中世後期・近世初頭には殆どみられないのに対し、他地域では多かれ少かれこの成立が一般傾向としてみられるのである。隣接した地域における都市成立のこの格差の基本的原因を探ることは、とりもなおさず、中世的都市構造に対する近世的な都市構造成立の基本的前提条件を探ることともなることはいうまでもない。

さて中世的な都市と農村の分業体制、その上に築かれる市場構造をこえて、農村内に新しく市場関係が成立するためには、何よりもまず農村共同体内の条件、特に領主―農民関係が、そのことを可能ならしめる程度に個々の農民にとって有利でなくてはならない。（注1）このことは東ドイツと西ドイツの市場構造の格差に注目したウェーバーが、鋭く指摘しているところである。（注2）すなわち彼は両地域の市場構造の質的差異は、一方で社会的分業の展開度によると共に、他方で農業制度における両者の差異によるとしている。そして具体的には東ドイツが植民地域である為に、西ドイツにおいてすでに形成されていた共同体の法的高権 Rechthoheit（尨大な判告集に示される）が見失われたこと、農民層を支配するグルントヘルの直営地も、

西では、共同体員の土地の間に散在しており、しばしば小領邦君主とグルントヘルが異なった人格であることから農民に有利な領主間の抗争さえ起ったのに対し、東では一村落が一人の領主の手中に握られていたこと、さらに領主直営地の大きさも東では西より大であって、直営地拡大の可能性もそれだけ大であった等の理由をあげている。そしてこれらの諸要因が絡み合って、東では領主直営地拡大によるグーツヘルシャフトが農民層への強力な圧迫によって成立し、西では生産の主体はあくまで独立小農民層によって担われ、領主は地代荘園制で満足したのであるが、この農業制度の歴史的条件こそ、自然条件と共に両地域の社会的分業、そしてこれに基く市場構造の差異をもたらした基本条件だとするのである。

ところで上ラウズィッツはエルベ河以東での地域であり、ウェーバーのいう東ドイツに入るのであって、中部ドイツの農業制度を研究したリュトゲは、中部ドイツにおけるグーツヘルシャフトの例外的成立地域の中に、最東部のラウズィッツ地方をアンハルト、ブランデンブルグと共にあげている。[注3] このことは例のブラシュケの史料によっても立証される。[注4] すなわち第七表をみるとラウズィッツの最も西部のバウツェンと中部ザクセン北部のオシャッツと西部のハルツ地方のケムニッツ周辺の三地域における騎士農場の成立した村落の数が集録されている。ブラシュケの指摘しているように、エルベ以西のザクセンでも騎士農場＝グーツヘルシャフトの成立は皆無であった訳ではなく、オシャッツ、ケムニッツの夫々にもその存在は確認しうる。[注5] この史料ではその大きさ、成立の仕方は知りえぬが、ブラシュケは別の論文で既存の直営地の拡大と、個々の農民保有地の犠牲による騎士農場の新設と、主村落の耕地の犠牲による騎士農場の拡大もしくは新設の三通りの成立があること

第七表

	Bautzen		Oschatz		Chemnitz	
成立時期	騎士農場のある村	ない村	騎士農場のある村	ない村	騎士農場のある村	ない村
16 c	66		29		13	
17 c	44		10		10	
18 c	13		2		4	
19 c	4		0		0	
計	127	111	41	105	27	104

K. Blaschke, Historisches Ortsverzeichnis von Sachsen より作成。

とを指摘、[注6] この内、最後の最も本格的な型は比較的早く十六世紀に集中し、しかも例外的に少いのに対し、第一、第二の型は十六世紀後半から十八世紀にかけて集中し、[注7] 特に第一の型が個々の農地の強制買上げによって多く成立しているとしている。[注8] そして第一の型が中部ザクセン南部のドレスデン近辺に集中しているのに対して、第三の型はボルナ、オシャッツ、グローセンハインを結ぶ北西ザクセンから中部ザクセン北部にかけて多く、ケムニッツ周辺は割合少く、強いていえば第二の型がみられるとしている。[注9] さてこのようにエルベ北西のザクセンでも多少のグーツヘルシャフトへの志向は存在し、特にオシャッツ近辺はケムニッツ近辺に対しずっと多いのであるが、上ラウズィッツと比べると、騎士農場成立の村とそうでない村との比率は圧倒的に上ラウズィッツが高い。純粋に騎士農場の記述のあるものだけでみると上ラウズィッツでは五十七・六対四十二・四、オシャッツでは二十八・二対七十一・八、ケムニッツでは二十・六対七十九・四の比率となる。そして上ラウズィッツの騎士農場の約半数が十六世紀に集中しており、これに十七世紀の四十四が続いていることをみると、先の都市成立においてこの地域が十六世紀に全くの空白期を迎えていることが、グーツヘルシャフトの広範な成立と密接に関連していることを推定せざるをえない。従って農村市場の成立、発展をこの地域において阻んだのも農業制度における封建反動の一方的勝利（グーツヘルシャフト体制の確立）であるということができよう。[注10] この地方は周知のようにザクセンの中でも早くから麻織物工業が行われ、[注11] 十五・六世紀にはツンフト・カウフといわれる独自の製品販売法まであみだした地域であるが、そのような社会的分業も、かかる封建反動の強化の中で進展したのであるから、それはツンフト・カウフが象徴的に示すように、あくまで中世的都市を中心としたものであり、農村工業へのツンフト保守主義の露骨な攻撃が封建反動の援護射撃の下に成功をおさめたといいうるのである。[注12] 尤もこの地方でも十八・九世紀には構造停滞の枠を破って、農村的市場町が大量に成立してくるのであるが、これは一方でグーツヘルシャフトの近代化（農奴解放）をもたらす要因としての小商品生産の萌芽として評価しうると共に、他方ではグーツヘルシャフトの中心地に成立している例が圧倒的であるところから、（十七世紀

以降の農村的市場町十三の内、八までが騎士農場のすでに成立せる村落の市場町化したものである。）むしろ領主的商品生産自体の近代化、農奴的労働の賃労働化による局地的商品市場の形成としてみるべきであろう。[注13] かくして我々は上ラウズィッツの特殊な都市成立の究明から、農村市場の成立、展開が基本的には農村共同体内部の事情、とりわけ共同体と領主との関係によって規定されていることを知りえた。そして上ラウズィッツの例は極端な反動化による農村市場の圧殺という構造停滞の最も極端な道（いわゆるプロシァ型の道）を端的に示したといえよう。このことは裏を返せば、ザクセンの他地域は、基本的にはブラシュケ、リュトゲが実証によって確認しているように、独立小農民層の支配的な地域であり、[注14] 封建領主はこれら独立小農民の結集する農村共同体を上から把握することによってのみその支配体制を維持しえていたのであって、このような農民層の相対的有利さこそ、社会的分業の進展を深め、そこから農村内部における市場関係をかなり広く成立せしめた基本原因であろう。[注15] 勿論これら三地域間にも不均等性は存在し、特に北西ザクセンの場合農村よりの自生的小都市（化石型）が割合多いことと農村的市場町が他より甚だ少いという特徴をもち、いわゆる市場構造の化石化が他より著しいといえようが、このような構造停滞の原因もやはり先にみたようなこの地域の本格的騎士農場のかなりの成立に求められるのではなかろうか。ブラシュケの実証、先の統計はこの推定を十分裏づけてくれる。尤も全村落の騎士農場への転化といっても、ブラシュケのいうように、主に荒廃せる村落の領主による利用であるから、エルベ以東のそれとは区別されるべきであるが、このような領主直営地の大規模の拡大は、領主と農民の力関係に明らかに影響するのであって、これが農村市場の進展のストップと化石化をこの地域にもたらした基本原因としうるであろう。[注16] 従って西北ザクセンは農業制度においても、都市構造についても、エルベ以西の中ではより構造停滞的な型（自生型の大半が化石することにより、中世都市的市場構造が支配的であるような）を示していることになる。これに対し他の二地域、特にエルツ山地地帯の自生的小都市を数的に上廻る農村的市場町の成立は、この地方の農民層の領主に対する相対的有利さをますものであり、これは特に集落形態が岳陵地帯から山地へかけての森林地帯における森林フーヘもしくは散村が支配的であることとも関係があると思われる。[注17]

このように農村市場の進展をもたらす基本原因は、農村内部の事情であるが、それと共にこのような基本的前提に支えられて社会的分業がどこまで農村内部に向い展開するかどうかということが農村市場発展の第二の重要な契機であり、先の二地域はこの点についての重要な示唆を我々に与えてくれる。

注（1） この問題については大塚久雄「資本主義社会の形成」（一）、社会科学講座、弘文堂六、所収、同氏「欧州経済史」百十三―百七十八頁、同氏編著「西洋経済史講座」二巻の同氏総説三―三十四頁、同氏「共同体内分業の存在形態とその展開の諸様相―共同体解体の歴史的前提条件の解明という視角から―」（一）経済学論集二十八巻一号八十七―百頁。R. Gradmann Die städtische Siedlungen～, S. 173, SS. 189―192. Albrecht Timm, Studien zur Agrargeschichte Mitteldeutschland, 1956, SS. 87―96.

（2） M. Weber, a. a. O., SS. 443-449.

（3） F. Lütge, Die mitteldeutsche Grundherrschaft, SS. 198-199., G. Dessmann, Grundherr und Bauer in Schlesien, 1904. W. Boelcke, Bauer und Gutsherr in der Oberlausitz, Zeitschrift für Geschichtswissenschaft, 1953-57.

（4） K. Blaschke, Historisches Ortsverzeichnis von Sachsen, Bd. 4 Oberlausitz, SS. 1-34, Bd. 2, Nordwestsachsen, SS. 95-117, Bd. 3, SS. 17-36. なおケムニッツの中には隣接地域フレーハも入っている。

（5） K. Blaschke, Das Bauernlegen in Sachsen, Vierteljahrschrift für Sozial-und Wirtschaftsgeschichte, Bd. 42, SS. 97-124. 特に S. 101. にあるブラシュケの作成したザクセンにおけるバウエルン・レーゲンの地図を参照。これをみると最西部のツヴィカウ、プラウエン地方にすらその存在を確認しうる。またケムニッツのシュトライトドルフ村、オシャッツのケティッツ村は他の地域の十五ヵ村と共に、荒廃村落全体に新しく騎士農場が設置された。Ibid., S. 109. またケムニッツ周辺の修道院領のノイキルヘ村は、宗教改革による世俗化を機会に騎士農場設立の為、農地買上げが行われている。

（6） Ibid., SS. 103-110.

（7） Ibid., S. 106, 110.

（8） Ibid., SS. 103-104. これはブラシュケによると、農村の社会構造への影響が最も少い場合である。

（9） Ibid., S. 111.

（10） これについては藤瀬浩司「東ヨーロッパの農場領主制」（大塚久雄他編「西洋経済史講座三巻百三十九―百六十四頁」）が、騎士農

場の成立と社会的分業の進展の仕方及び都市成立の関係を関連づけた好個の論文である。

(11) G. Aubin und A. Kunze, Leinenerzeugung und Leinenabsatz im östlichen Mitteldeutschland zur Zeit der Zunftkäufe, S. 39 f. Arno Kunze, Der Frühkapitalismus in Chemnitz, 1958, SS. 7-8. Horst Jecht, Beiträge zur Geschichte des ostdeutschen Waidhandels und Tuchmachergewerbes, S. 53 f.

(12) H. Jecht, ibid., SS. 30-104. Fridolin Furger, Zum Verlagssystem als Organisationsform des Frühkapitalismus im Textilgewerbe, 1927, SS. 44-47, 63-64, 73-74., A. Skalweit, a. a. O., SS. 34-35., F. Lütge, Die wirtschaftliche Lage Deutschlands vor Ausbruch des Dreißigjährigen Krieges, SS. 80-84.

(13) これについては北条功「東ドイツにおける『農民解放』」西洋経済史講座四巻五十七―九十四頁を参照。北条氏はそこで萌芽的局地的市場圏と領主的商品経済の対抗関係がみられつつも、結局領主的商品経済により局地的市場圏が圧倒されて行く姿を描いている。なお十八世紀末の小商品生産の進行については、Rudolf Forberger, Die Manufaktur in Sachsen vom Ende des 16. bis zum Anfang des 19 Jahrhunderts, 1958, SS. 266-271. におけるツイタウ等六都市と農村工業のはげしい抗争にもよく示されていよう。

(14) F. Lütge, Die Mitteldeutsche Grundherrschaft, SS. 65-78., K. Blaschke, a. a. O., S. 116.

(15) このことは純農業地域（マイセン、グローセンハインやテューリンゲン）でも小都市、市場町、農村市場が成立していることによく示されている。マイセンについては Heinz Pannach, Das Amt Meissen, 1960. S. 49, 68. テューリンゲンについては Otto Kius, Die thüringische Landwirtschaft im 16 Jahrhundert, Jahrbücher für National Ökonomie und Statistik, Bd. 3, SS. 154-160.

(16) K. Blaschke ibid., SS. 109-110 f.

(17) K. Blaschke, Historische Ortsverzeichnis von Sachsen でみると、エルツ山地地帯は殆どの農村は森林フーヘ村落で散村のやや集中した型であるが、北西へ行く程集村が多くなっている。但し集落形態と都市の関係については今後考究すべきものが多い。ただグラッドマンの研究と照合してもいえることは集村のある地域は、概ね中世初期もしくはこれ以前からの定住地が多く、都市の中にも古い起源のものが存在し、これが、全体の都市、市場構造に影響を与えることである。なおグルントヘルシャフトとの関係については、今後の研究にまつところ大である。なおこの地方の集落形態とグルントヘルシャフトについては、R. Kötschke, Ländliche Siedlung und Agrarwesen in Sachsen, 1953. を参照。

イギリスにおける兌換停止下の地方銀行

――地金論争との関連において――

中西充子

はしがき

イギリスにおいて地方銀行は、イングランド銀行と並んで資本の蓄積および移動に重要な役割を果して来た。一八世紀の後半から起った産業革命は、経済の発展に欠くことのできない金融業務の増大をもたらしたが、それにともなって地方銀行の活動も伸長しつつあったとき、イギリスは、イングランド銀行による正貨支払停止という事態に直面せざるを得なかった。

クラッパムが、「イングランド銀行における正貨支払停止の最初の十年間の、イギリス銀行制度および通貨制度における変化を誇張することは、容易ではない」(注)とのべているように、正貨支払停止は、地方銀行の上にも多くの影響をおよぼした。

本稿においては、イギリスにおける兌換停止下（一七九七―一八三一年）の地方銀行、その構造および機能について考察するのであるが、とくに地金論争との関連において議論を進めることを目的としている。